

保護者と保育者による幼児の情緒・行動評定の 一貫性および相違性

田口 雅徳

Convergence of the parent's and nursery school teacher's evaluation of young children's emotional and behavioral traits

TAGUCHI Masanori

The aim of this study was to examine the agreement between parents' and nursery school teachers' evaluations of young children's emotional and behavioral traits. The participants were 51 parents of the four-year-olds and their 5 nursery school teachers, who were asked to evaluate the items of behavioral and emotional measurement scale for a young children. The factor analysis yielded four factors, comprised of 16 items in total. These factors were "Emotional instability", "Impulsiveness", "Physical and mental health problems", "Aggressive behavior". The Kappa coefficient was calculated to estimate the agreement in parent-teacher evaluations on each item. High Kappa value was obtained in "Physical and mental health problem", but low in "Emotional instability". Results suggested that the agreement of a parent's and teacher's evaluation was high if rating was based on observable child behaviors.

問 題

中央教育審議会幼児教育部会は2005年1月に答申を提出し、今後の幼児教育の方向性を示している。それによると、急激に変化する今日の社会環境のなかでは、幼児の日々の生活の連続性、発達や学びの連続性を確保し、その成果を小学校教育へと円滑に繋げていくことが求められるという。また、それを実現するためには、幼稚園や保育所などの幼児教育施設と、小学校や地域社会、家庭とが緊密に連携していくことが必要だと指摘している。こうした流れから、幼稚園、保育所と小学校との連携に関わる研究、および、家庭と保育所、幼

稚園との連携に関する研究がいつそう重要となってきた（丹羽ら，2004）。そこで、本研究では、とくに家庭と保育所との連携に関わる問題を取り上げ、検討していくこととする。

家庭と保育所との連携を考えたとき、その土台となるのは子どもに対する保護者と保育者の共通理解だといえる。こうした共通理解をもとに、家庭と保育所が子どもに対して連続性のある関わりをもつことにより、子どもの健やかな育ちが期待できる。

しかし、現実には、子どもの発達についての保護者の理解と保育者の理解は異なっており、それが保護者－保育者間における連携の妨げになっているという（森田ら，2012）。とくに「落ち着きがない」、「他児とトラブルが多い」、「感情がコントロールできない」などの「気になる子」については、保護者と保育者との間で共通認識をもつことが難しいとされる（橋本ら，2015；本郷ら，2003；嘉数ら，2007）。「園での様子を保護者に伝えても理解してもらえない」、「保育者の話をきちんと聞いてくれない」、「子どもの様子を保護者に伝えるまでに多くの時間を要した」などのように、保育者側が保護者との共通認識を得るのに苦慮している事例がこれまで多く報告されている（橋本ら，2015；久保山ら，2009）。

先行研究のなかには、こうした子どもの「気になる」行動に対する保護者と保育者の評定について、実際に比較・検討している研究もみられる。たとえば、吉田ら（2003）は、幼稚園や小学校に通う子どもの保護者と教師および保育者に、子どもの攻撃行動や思いやり行動を評定させた。その結果、3歳児では保護者に比べて教師や保育者の方が全般的に子どもの攻撃行動を高く認知していたという。丹羽ら（2004）も、幼稚園や保育所、小学校に通う子どもの保護者と、教師および保育者を対象に基本的態度や自主性などを評定してもらい、両者の評定の差違を検討した。その結果、「落ち着いてすわっていられる」などの項目で保護者の評定値が全般的に高く、子どもの発達を楽観的に捉えていた。これに対して教師や保育者は子どもの問題行動を高く認知していた。同様の結果は、強矢・諏訪（2006）でも示されている。

いっぽう、辻野ら（2007）は5歳児をもつ母親と担当保育士を対象に子どもの欲求不満行動、集中力の欠如、反抗的行動、怠惰行動の4因子を評定してもらい、両者の評定結果を比較した。その結果、全評価項目のうち7割以上で母親の方が保育士よりも評定値が有意に高かったという。辻野ら（2007）の研究結果では、上述の先行研究とは異なり、母親の方が子どもの問題行動を高く認

知していることが示された。平田(2011)も同様に、「攻撃的な行動」、「多動」、「きまりや指示を守らない」の3項目では保護者の評定が保育士の評定を上回っており、保護者の方が子どもの問題行動を高く認知していることを指摘している。

以上のように、先行研究においては保護者と保育者の間で子どもの問題行動の評定にズレがあることでは見解が一致している。しかし、保護者と保育者のどちらが子どもの問題行動を高く認知しているかについては見解が分かれていた。保護者と保育者では、子どもの問題行動のうちでも重視する視点が異なっており、その違いによって、ある面では保護者の方が子どもの問題行動を高く評価し、別な面では保育者の方が子どもの問題行動を高く評価している可能性が考えられよう。この点は検討する余地があると考えられる。

また、これまでの研究の多くは、子どもの問題行動に対する保護者と保育者の評定の平均を比較しているだけであった。各園児に対する両者の評定が実際に一致しているかについては直接検証していない。この点に関連して、大神(2011)は、一人ひとりの子どもの問題行動について、保護者と保育者に「心配の程度」を評定させ、両者の間でその評定が一致するかを検証した。その結果、半数以上の子どもにおいて両者の評定が一致せず、とくに情緒面の評価が一致しないことが明らかになった。ただし、大神(2011)の研究では、評定した子どもの人数が少なく、保護者と保育者の評定の一致度については事例的な検証にとどまっていた。

そこで、本研究では幼児の情緒や行動を評価する尺度を作成して保護者と保育者に各児を評定してもらい、各項目のKappa係数を算出することで両者の評定の一致度を検証していく。同時に、評価尺度を構成する項目のなかで一致係数が低い項目および高い項目を検出し、どのような下位尺度項目で保護者と保育者の評価が一致しやすいのかを明らかにしていく。さらに、保護者と保育者では、子どもの問題行動のなかでも認知しやすい面が異なるのかを明らかにしていく。以上の点を検討することが、本研究の目的である。

方 法

被験者

埼玉県内の5箇所の公立保育所を対象とした。各保育所の4歳児クラスの保護者92名に回答を依頼した。回答が得られた園児のうちランダムに51名を抽出し、これらの園児を担当する保育者5名にも、それぞれ評定を求めた。各保育者が評定した園児の数は8～12名であった。

質問項目

保護者および保育者に子どもの情緒や行動について評定してもらうため、中田ら(1999)による「幼児の行動チェックリスト(2-3才)」や光岡ら(2003)による「幼児用疲労症状調査」を参考に質問項目を作成した。「幼児の行動チェックリスト」はAchenbach(1992)が作成したChild Behavior Checklist/2-3(CBCL/2-3)の日本語版であり、合計95項目から構成されていた。これら95項目のなかから本研究の目的に照らして、反抗や攻撃性に関する項目(「怒りっぽい」、「けんかが多い」、「ものを壊す」など)、引きこもりや不安に関する項目(「家の外に出たがらない」、「神経質である」など)、注意集中に関する項目(「落ち着きがない」など)を抽出し、それらを参考にして一部の文言を変更し23項目を作成した。

また、最近の幼児の行動上の問題として、「心身の不調」の問題が取り上げられている(長谷部ら, 2015)。そこで、光岡ら(2003)の「幼児用疲労症状調査」のなかから「頭が痛い」、「お腹が痛い」とよくいう「だるそうにしている」などの「心身の不調」に関わる項目を抽出し、それを参考として一部文言を変更し7項目を作成した。以上のように、本研究では合計30項目から成る尺度を作成し、子どもの情緒・行動評価尺度として使用した。

各項目は「1. あてはまらない」、「2. 少しあてはまる」、「3. わりとあてはまる」、「4. 非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。保護者、保育者とも質問項目の内容および評定方法は同一とした。質問紙は無記名式であったが、各調査対象児に対する保護者と保育者の回答を照合できるように、質問紙にはそれぞれ識別番号が付されてあった。

調査手続き

保護者への質問紙の配布は、各保育所を通しておこなわれた。紙面で研究目的などを説明し、同意が得られた保護者にのみ回答を求めた。それぞれ質問紙を自宅に持ち帰ってもらい、全ての項目について回答するよう求めた。質問紙を配布してから1週間ほど各園に回収箱を設置し、そこに質問紙を提出するよう依頼した。保育者には研究目的を紙面および口頭で説明し、同意を得たのちに質問紙を配布した。質問紙の回収は、保護者と同様に1週間後におこなった。

結 果

情緒・行動評価尺度の因子分析

本研究で使用した尺度は複数の先行研究の尺度を参考に作成されているため、改めて尺度の構成を検討する必要がある。そこで、保護者と保育者の評定結果を合わせた102名分のデータを用いて、情緒・行動評価尺度の30項目について最尤法プロマックス回転による因子分析をおこなった。固有値の基準を1.00以上と設定したところ8因子が抽出されたが、因子負荷量が低い項目（.400未満）や複数の因子に高い因子負荷量を示す項目がみられた。そこで、こうした項目を削除していき、解釈可能な結果が得られるまで繰り返し因子分析をおこなった。最終的には4因子で解釈可能な結果を得た（Table1）。

Table1 幼児の情緒・行動評価尺度の因子分析結果

項 目	第1因子 第2因子 第3因子 第4因子				共通性
	情緒的 不安定	衝動性	心身の 不調	攻撃的 行動	
よくすねる	.844	-.131	.021	-.079	.600
怒りっばい	.813	.069	-.125	-.048	.604
気分や感情がころころ変わる	.664	.105	.086	.037	.511
要求がかなえられないと、気がすまない	.631	.030	-.073	.158	.596
他の子と、けんかが多い	.625	.225	.162	-.001	.672
気分が落ち込みやすい	.428	-.159	.389	.069	.442

落ち着きがない	.152	.963	-.104	-.178	.844
じっとしてられない	.089	.817	-.068	.018	.713
人の話を聞くのが苦手である	-.317	.579	.181	.367	.625

いつも、だるそうにしている	-.204	.290	.677	-.146	.484
「おなかがいい」、「頭がいい」とよくいう	.088	-.080	.665	-.071	.430
不安を感じやすい	-.042	-.147	.608	.131	.380
「気持ちが悪い」とよくいう	.252	-.054	.506	-.001	.391

自分のものや他人のものをすぐこわす	.094	-.027	-.130	.909	.819
動物をいじめる	-.052	-.068	.061	.714	.463
他人に対してすぐに手が出る(暴力をふるう)	.289	.201	.018	.483	.667
寄与率	34.98	9.57	8.05	5.17	
α 係数	.86	.84	.68	.81	

第1因子は「よくすねる」、「怒りっばい」、「気分や感情がころころかわる」などの項目で高い因子負荷量を示していた。そこで、「情緒不安定」に関する因子とした。第2因子は「落ち着きがない」、「じっとしてられない」などの

項目で高い因子負荷量を示しており、“衝動性”に関する因子とした。第3因子は「だるそうにしている」、「気持ちが悪いとよく言う」などの項目で高い因子負荷量を示していた。そこで、“心身の不調”に関する因子とした。第4因子は、「自分のものや他人のものをすぐこわす」、「動物をいじめる」などの項目で高い因子負荷量を示しており、“攻撃的行動”に関する因子とした。

これら4つの下位尺度についてCronbachの α 係数を求めたところ、“情緒不安定”因子で.86、“衝動性”因子で.84、“心身の不調”因子で.68、“攻撃的行動”因子で.81となった (Table1)。第3因子の“心身の不調”因子の α 係数が、他の因子と比べると低かったが、全体的に α 係数は満足できる数値であった。上記の因子分析で得られた4つの下位尺度は一定の内的整合性を備えていると判断した。そこで、これ以降の分析には、この4因子16項目を用いることとした。

保護者・保育者間の評定の一致度

因子分析で得られた4因子16項目について、保護者と保育者の評定の一致度を検討した。本研究では、各項目への回答として「1. あてはまらない」から「4. 非常にあてはまる」までの4件法で評定を求めている。ただし、評定の一致度について検討するにあたり、「あてはまる」に該当する回答については評定値の違いを考慮しないこととした。すなわち、「2. 少しあてはまる」、「3. わりとあてはまる」、「4. 非常にあてはまる」の回答については、すべて「あてはまる」として分類をおこなった。そのため、各評定者の回答は「あてはまらない」と「あてはまる」の2カテゴリーに分類された。各項目における保護者、保育者間の評定の一致および不一致の度数をTable2に示した。

一致数が多かった項目は「落ち着きがない」、「いつもだるそうにしている」、「気持ちが悪い」とよく言う、「自分のものや他人のものをすぐこわす」、「動物をいじめる」などであり、これらの項目では51名中40名以上で評定が一致していた。ただし、「落ち着きがない」以外の項目は「あてはまらない」という評定での一致が多かった。

いっぽう、不一致の数が多かった項目は「よくすねる」、「要求がかなえられないと、気がすまない」、「不安を感じやすい」の3項目であった。これらの項目では、不一致の割合が4割を超えていた。

これら評定の一致度について統計的検定をおこなうためKappa係数（以下、 K 係数）を求めた。ところで、分析に使用したのは保護者51名と保育者5名の評定結果であるが、統計的検定をおこなうにあたっては、便宜的に評定結果

Table2 各項目における保護者・保育士間の評定の一致・不一致数

項目	評定者		一致		不一致	
	保護者	保育士	あてはまる	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない
<情緒不安定因子>						
よくすねる			13	16	13	9
怒りっぽい			18	16	8	9
気分や感情がころころ変わる			10	22	8	11
要求がかなえられないと、気がすまない			9	21	15	6
他の子と、けんかが多い			14	24	4	9
気分が落ち込みやすい			6	30	7	8
<衝動性因子>						
落ち着きがない			26	17	3	5
じっとしてられない			18	18	7	8
人の話を聞くのが苦手である			17	16	7	11
<心身の不調因子>						
いつも、だるそうにしている			3	37	2	9
「おなかがいたい」、「頭がいたい」とよくいう			13	23	5	10
不安を感じやすい			14	16	10	11
「気持ちが悪い」とよくいう			2	42	1	6
<攻撃的行動因子>						
自分のものや他人のものをすぐこわす			5	35	7	4
動物をいじめる			0	44	2	5
他人に対してすぐに手が出る（暴力をふるう）			6	29	7	9

を保護者と保育者の2者による評定データとして扱った。また、先に述べたように、16項目のうち「気持ちが悪い」とよく言う」や「動物をいじめる」などの項目では、「あてはまる」に比べて「あてはまらない」での一致数が多く、やや偏りがみられた。そこで、Byrtら（1993）による方法を用いて調整を加えた*K*係数を算出することとした。

各項目の調整済み*K*係数はTable3に示す通りであった。「よくすねる」、「気分や感情がころころ変わる」、「要求がかなえられないと、気がすまない」、「不安を感じやすい」の4項目では有意な結果は得られなかった。また、「怒りっぽい」、「人の話を聞くのが苦手である」、「他人に対してすぐ手が出る（暴力をふるう）」の3項目では有意な結果は得られたが、*K*係数が.29～.37であり、比較的低い値となった。したがって、以上の7項目では保護者と保育者の間で評

Table3 各項目の調整済みK係数

項 目	K係数
<情緒不安定因子>	
よくすねる	n.s.
怒りっぽい	.33*
気分や感情がころころ変わる	n.s.
要求がかなえられないと、気がすまない	n.s.
他の子と、けんかが多い	.49***
気分が落ち込みやすい	.41**

<衝動性因子>	
落ち着きがない	.69***
じっとしてられない	.41**
人の話を聞くのが苦手である	.29*

<心身の不調因子>	
いつも、だるそうにしている	.57***
「おなかがいたい」、「頭がいたい」とよくいう	.41**
不安を感じやすい	n.s.
「気持ちが悪い」とよくいう	.73***

<攻撃的行動因子>	
自分のものや他人のものをすぐこわす	.57***
動物をいじめる	.73***
他人に対してすぐに手が出る(暴力をふるう)	.37**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

定が一致しにくい傾向にあることが示された。

つぎに、「他の子と、けんかが多い」、「気分が落ち込みやすい」、「じっとしてられない」、「おなかが痛い」、「頭が痛い」とよくいう、「自分のものや他人のものをすぐこわす」の5項目はK係数が.41～.57であった。これらの項目では、保護者と保育者の評定は中程度の一致を示すことが明らかとなった。

さらに、「落ち着きがない」、「気持ちが悪い」とよくいう、「動物をいじめる」の3項目ではK係数が.69～.73であり、比較的高い値であった。これらの項目における保護者と保育者の評定は一致しやすい傾向にあることが示された。

因子別にみると、「情緒不安定」因子では「他の子と、けんかが多い」と「気分が落ち込みやすい」という2項目はK係数が中程度であった。しかし、それ以外の4項目はK係数が有意ではない、もしくは、K係数が低い項目であった。「情緒不安定」因子に含まれる項目では、全般的に保護者と保育者の評定が一致しにくいことが示された。

いっぽう、“心身の不調”因子では「いつもだるそうにしている」、「おなが
がいたい」、「頭がいたい」とよくいう」、「気持ちが悪い」とよくいう」の3
項目で K 係数が中程度以上となった。4項目のうち評定の一致度が低かったの
は、「不安を感じやすい」の1項目だけであった（Table3）。“心身の不調”因
子では、保護者と保育者の評定が比較的一致しやすいことが示された。

つぎに、“衝動性”因子および“攻撃的行動”因子については、項目によっ
て K 係数の値にやや違いがみられた（Table3）。“衝動性”因子では、「落ち着
きがない」、「じっとしてられない」の2項目で K 係数の値が中程度以上とな
り、“攻撃的行動”因子では「動物をいじめる」、「自分のものや他人のものを
すぐこわす」の2項目で K 係数が中程度以上となった。しかし、“衝動性”因
子では「人の話を聞くのが苦手である」、「攻撃的行動”因子では「他人に対し
てすぐ手が出る」の項目で K 係数が低い値を示していた。“衝動性”因子と“攻
撃的行動”因子の2つの因子では、一致しやすい項目と一致しにくい項目が含
まれていることが示唆された。

考 察

情緒・行動評価尺度の因子分析

本研究では、まず幼児の情緒・行動を評価するための尺度を検討した。先行
研究を参考として30項目から成る質問紙を作成し、保護者と保育者に評定を
求めた。得られたデータをもとに因子分析をおこなったところ、“情緒不安定”、
“衝動性”、“心身の不調”、“攻撃的行動”の4因子を得た。

4因子のうち“衝動性”因子については、先行研究（中田ら、1999）の「注
意集中」に関する因子に対応しており、“攻撃的行動”因子は「攻撃性」に関
する因子に対応していた。また、“心身の不調”因子のうち「不安を感じやすい」
以外の項目は、光岡ら（2003）の疲労症状に関する因子に対応していた。「不
安の感じやすさ」は、本研究では精神的疲労にかかわる項目として“心身の不
調”因子に含まれたと考えられる。

つぎに、“情緒不安定”因子には「よくすねる」や「怒りっぽい」など先行
研究において「反抗」因子に含まれていた項目や、「他の子とけんかが多い」
や「気分が落ち込みやすい」など「攻撃性」因子や「不安」因子に含まれてい
た項目がみられた。これらの項目は、いずれも情動的反応や情動の浮き沈みに
関する内容だといえる。本研究では、そうした項目が“情緒不安定”因子とし
て1つにまとまったと推察される。武井ら（2007）の研究でも、幼児の気質を

測定する尺度の因子として「否定的感情反応」因子を見出している。この因子は、本研究における“情緒不安定”因子と項目内容が類似しており、本研究の結果と一致していた。このように、本研究で得られた4つの因子は、先行研究の知見と照らしてみても妥当なものだと考えられる。

保護者・保育者間の評定の一致度

つぎに、幼児の情緒・行動に対する評定が保護者と保育者の間でどの程度一致するのかを検証した。上述の4因子16項目について、それぞれ K 係数を求めた。その結果、“情緒不安定”因子の項目では K 係数が中程度以下となり、保護者と保育者の間で評定が一致しにくいことが示された。いっぽう“心身の不調”因子では大半の項目において K 係数が中程度以上となり、保護者と保育者の間で評定が一致しやすい傾向にあることが明らかとなった。“衝動性”や“攻撃的行動”の因子では項目によって K 係数の数値に違いがみられ、保護者と保育者の評価に一致しやすいところと、一致しにくいところがあることが示唆された。

K 係数が有意とならなかった項目は、「よくすねる」、「気分や感情がころころ変わる」、「要求がかなえられないと、気がすまない」、「不安を感じやすい」の4項目であるが、“情緒不安定”因子にはこのうち3項目（「よくすねる」、「気分や感情がころころ変わる」、「要求がかなえられないと、気がすまない」）が含まれていた。情緒に関わる項目において評価が一致しにくいという結果は、大神（2011）の研究でも示されており、本研究の結果を支持している。

“情緒不安定”因子は、上述したように、子どもの情動的反応や情動の浮き沈みに関わる項目であった。「他の子と、けんか多い」以外の項目では、子どもの内的な感情を押し量って評価しなければならず、客観的指標に基づいて評価することは難しい。各評価者はこれらの項目を主観的な手がかりに基づき評定したと推察される。そうした理由から、保護者と保育者の評定が一致しなかったと考えられる。

これに対して、“心身の不調”因子では K 係数の数値が中程度以上となる項目が多く含まれており、保護者と保育者の間で評定が比較的一致しやすいことが示唆された。“心身の不調”因子は、「気持ちが悪い」とよくいう、「おなかのいたい」、「頭がいたい」とよくいう」など客観的に観察しやすい行動を評定する項目から構成されていた。そのため、 K 係数が他の因子に比べて高い値を示したと考えられる。

中台ら（2002）は、幼児の問題行動として攻撃や多動といった外在化問題行動と、引きこもりや不安の感じやすさなどの内在化問題行動を取り上げ、保護者と保育者にこれらの行動の評定を求めている。その結果、問題行動が目に見える形で現れる外在化問題行動では、保護者と保育者の評定に有意な相関がみられたとしている。同様の結果は、他の先行研究でも明らかにされており（たとえば、平田，2011；中台ら，2004）、これらの結果は本研究の知見と一致する。

ただし、本研究結果では“衝動性”や“攻撃的行動”など外在化問題行動と考えられる因子においても、 K 係数の数値が低い項目がみられた。この結果は、たとえ観察可能な行動であっても、保護者と保育者の評定が一致しにくい点がありうることを示唆している。その理由については本研究結果だけでは不明であり、今後の検討課題として残された。

ところで、 K 係数の値が全体的に低かった“情緒不安定”因子のうち「よくすねる」、「要求がかなえられないと、気がすまない」の2項目は、とくに評定の一一致率が低かった。これら2項目における不一致の頻度をみると、保護者が「あてはまる」と評定し、保育者が「あてはまらない」と評定するタイプの不一致が多かった（Table2参照）。すなわち、保護者の方が保育者よりも情緒的な不安定さの問題を高頻度で認識しているといえる。そのために、不一致数が増加したと考えられる。

これに対して、“心身の不調”因子の「いつも、だるそうにしている」、「おなかがいたい」、「頭がいたい」とよくいう、「気持ちが悪い」とよくいう」の3項目においては、保護者が「あてはまらない」と評定し、保育者が「あてはまる」と評定するタイプの不一致が多いことがわかる（Table2）。この3項目は K 係数の数値が高く、保護者と保育者間では比較的評定が一致する傾向にあった。ただし、どちらかといえば保護者よりも保育者の方が、子どもの“心身の不調”の訴えを高頻度で認識していることが示唆された。

これらの結果は、保護者と保育者では、子どもの問題行動のなかで、どのような点に着目しやすいかが異なることを示唆している。それと同時に、家庭と保育所という異なる環境では、実際の子どもの態度や振る舞い方に違いがあることも示唆していよう。この点については、大塚（1992）や辻野ら（2007）も、同様の指摘をしている。

先に述べたように、保護者－保育者間の評定の一致性には、観察可能な行動を指標として用いることができるかどうかに関わっていると考えられる。それと同時に、保護者－保育者間での重視する問題行動の違いや、家庭と保育所で

の子どもの行動様式の違いによっても、保護者－保育者間の評定に差が生じる可能性が考えられる。保護者と保育者が子どもに対する共通理解を深めていくためには、上述した点を相互に考慮する必要があるだろう。

引用文献

- Achenbach, T. M. (1992) *Manual for the Child Behavior Checklist /2-3 and 1992 profile*. Department of Psychiatry, University of Vermont.
- Byrt, T., Bishop, J., & Carlin, J. B. (1993) Bias, prevalence and kappa. *Journal of Clinical Epidemiology*, 46 (5), 423-429.
- 橋本逸子・木村留美子・津田朗子 (2015) 保育所における「気になる子ども」の研究：保護者への対応について 金沢大学つるま保健学会誌, 39 (1), 101-108.
- 長谷部比呂美・池田裕恵・日比暁美・大西頼子 (2015) 保育者評定による最近の幼児に見られる変化：小1プロブレムの背景要因 淑徳大学短期大学部研究紀要, 54, 31-48.
- 平田祐太郎 (2011) 養育者および保育者における子どもの問題行動の捉え方と養育者の育児負担感の関連 九州大学心理学研究, 12, 79-85.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査 発達障害研究, 25 (1), 50-61.
- 嘉数朝子・財部盛久・上地重矢子・石橋由美 (2007) 保育者の「ちょっと気になる子」の認識と保育に関する研究1：子供観との関連で 琉球大学教育学部紀要, 70, 25-35.
- 久保山茂樹・斉藤由美子・西牧謙吾・常島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 (2009) 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査：幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 36, 55-76.
- 強矢秀夫・諏訪きぬ (2006) 乳幼児の発達保障と幼保問題（その3）：幼稚園と保育園における保護者と保育者の子どもの発達の理解の差の分析を中心に 明星大学教育学研究紀要, 21, 57-65.
- 光岡攝子・堀井理司・大村典子・笠柄みどり・鈴木雅裕・小山睦美 (2003) 「幼児用疲労症状調査」からみた幼児の疲労と日常生活状況との関連 小児保健研究, 62 (1), 81-87.
- 森田愛子・藤井真衣 (2012) 幼児の発達への保護者と保育者の気づき 広島大学心理学研究, 12, 269-277.
- 中台佐喜子・金山元春 (2002) 園と家庭における幼児の社会的スキル及び問題行動 乳幼児教育学研究, 11, 61-68.
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2004) 母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響：養育態度→家庭における問題行動→園における問題行動というプロセスの検討 広島大学心理学研究, 4, 151-157.
- 中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子 (1999) 幼児の行動チェックリスト (CBCL/2-3) の日本語版作成に関する研究 小児の精神と神経, 39 (4), 305-316.

- 丹羽さかの・酒井朗・藤江康彦（2004） 幼稚園、保育所、小学校教諭と保護者の意識調査：よりよい幼保小連携に向けて お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 2, 39-50.
- 大神優子（2011）「気になる子」に対する保育者と保護者の評価：SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）を利用して 和洋女子大学紀要, 51, 179-187.
- 大塚健樹（1992） 母親と教師による幼児の行動評定比較 盛岡大学短期大学部紀要, 2, 43-52.
- 武井祐子・寺崎正治・門田昌子（2007） 幼児気質質問紙作成の試み パーソナリティ研究, 16（1）, 80-91.
- 辻野順子・雄山真弓・田麻みつ子（2007） 子どもの問題行動と母親の愛着との関連性、並びに子どもの問題行動に対する母親評価と保育士評価の相違性について 関西女子短期大学紀要, 17, 1-9.
- 吉田澄江・竹田京子・菅原正和・笹原裕子・加藤和子・加藤良・柿崎明広（2003） 幼児の行動認知に関する教師・保護者間の齟齬に関する研究 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 2, 151-158.